

MUSASHINO Vol. 95 *for* TOMORROW



巻頭

ゴールは一步一步のその先に

米田 功

Campus Eye

ベートーヴェンホール落成50周年

～創立者 福井直秋先生の夢の結実から半世紀～

卒業生インタビュー

ピアノが好き! 教えるのも大好き

樹原涼子

October 2010
vol.95

ゴールは一步一步の その先に

米田 功

● (メンタルトレーナー／アテネオリンピック体操団体金メダリスト) ●



米田 功 Isao Yoneda

7歳から体操を始め、全国中学生大会で個人総合優勝。清風高校時代にインターハイで個人総合2位。順天堂大学に進み、1997年の全日本学生選手権個人総合2位、'98年のNHK杯で個人総合優勝。'99年には全日本学生選手権個人総合優勝、全日本選手権の鉄棒で優勝を果たす。シドニーオリンピックではまさかの代表落選。その雪辱を晴らし、2004年のアテネオリンピックでは日本男子体操のキャプテンとしてチームを牽引。団体で金メダルを獲得。種目別の鉄棒でも銅メダル獲得。その後、度重なる手術を乗り越えた'08年のNHK杯での演技は観る者に感動を与えた。惜しくも北京オリンピック代表の座は逃したが、金メダリストとしての経験をもとに、'09年からメンタルトレーナーとしての活動をスタート。'12年の米田功体操クラブ設立に向け準備を進めている。アイディアメンタルトレーニングセンター所属。

2004年のアテネオリンピック、日本男子体操のキャプテンとしてチームを率い、団体で28年ぶりとなる金メダルへと導いた米田 功さん。しかしながらその体操人生は失意、挫折、ケガの多い波乱に満ちたものでした。現役を退いたいま、20数年にわたる選手生活を振り返っていただき、数々の失敗から学んだこと、メンタルの大切さ、練習に取り組む姿勢など、我々音楽を学ぶ者にも通じる貴重なお話を伺いました。(※この原稿はインタビューを元に構成したものであり、文責は編集部にあります)

転機 となった シドニー落選

米田さんが体操を始めたのは7歳のとき。小児喘息で身体の弱かった我が子を案じた母親が、何かスポーツをさせたいと考えていた折、道端で元気に側転をする小学生を見て「これだ!」と思ったのがきっかけだったといいます。

「体操を始めて、すぐにのめり込みました。最初は実家の近くの体操教室に通ったのですが、どんな試合に出ても必ず上位は名門マック体操ク

ラブの生徒が独占。自分も強くなりたくて、そこに移ることにしました。ただ練習は非常に厳しかったですね。休むのは正月のみ。あまりにハードな練習に、小学校の担任が『練習のやらせ過ぎじゃないか』と親を叱ったほどでした」

中学時代には全国大会で優勝、清風高校時代にはインターハイで2位、順天堂大学に進んでからも着実に成績を残し、2000年のシドニーオリンピック出場は本人も周囲も確実視していたものの、まさかの落選。

「小さな頃から、漠然とオリンピック出場は夢見ていました。シドニーにも、行けて当然というくらいの気持ちでした。今になって思えば、体操とそれほど真剣に向き合うこともなく、真面目に取り組んでいたわけでもなく、ただそれなりの結果を出すことができ天狗になっていたんだと思います。落選という現実を突きつけられて、自分に対する怒りがふつふつと湧いてきました。周囲の方々の期待も初めて分かったし、それに応えられない自分の不甲斐なさがとても腹立たしかったですね。それまでは、しゃかりきになって練習しなくても結果を出すのがカッコイイと思っていましたし、周りの目を気にしてばかりでした。でも落選以後は、人目など気にならなくなり、自分から進んで納得ゆくまで練習するよ

うになりました。次のアテネには絶対行くんだ、という強い意欲も出てきました」

プレッシャーとの対峙



シドニー以後の努力が報われ、米田さんは2004年のNHK杯で見事に個人総合優勝を果たしアテネオリンピックに出場。オリンピックという夢の舞台で感じたプレッシャーは予想以上のものだったといいます。

「選手としてやるべきことは、他の大会でもオリンピックでも変わりません。何が違うかといえば、周囲の見方、そして期待です。プレッシャーは想像以上でした。さらに、大きな

大会になればなるほど突発的なこと、想定外のことも起こりがちです。それに備えて何が起きても対応できるよう練習段階から意識していましたし、準備もしていました。アテネの決勝でも、アップをする時間がほとんどないという状況でしたが、寝起きでもすぐに演技できるくらいの準備をしていたので冷静に対応できました」

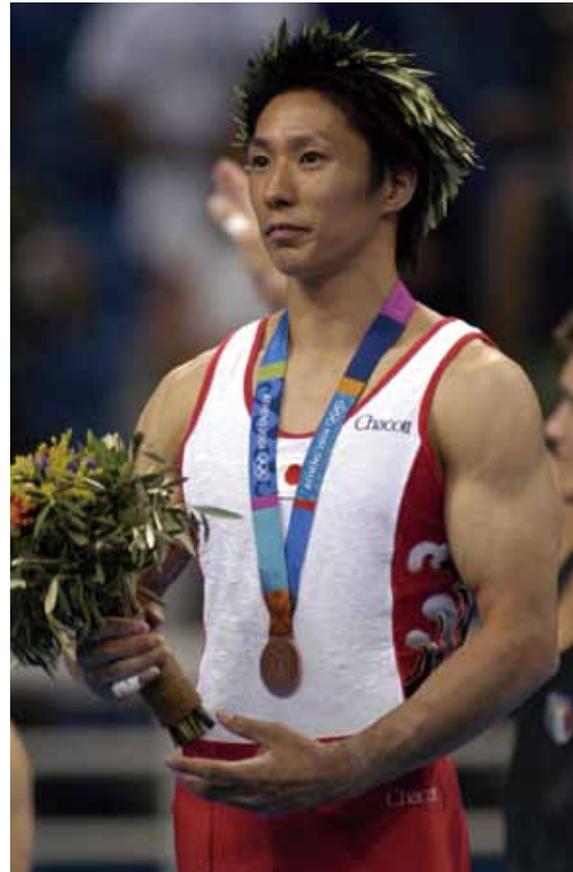
最後の演技者の富田選手が鉄棒で着地をピタリと決めた瞬間、日本の28年ぶりの団体金メダルが決定。この体操ニッポンの復活という快挙達成には、キャプテンを務めた米田さんの大会前からのある周到的な準備、作戦が少なからず貢献したようです。

「キャプテンに指名されてから、どうしたら金メダルが取れるかをずっと考えていました。思い浮かんだのは、なぜ柔道は金が取れて、体操は取れないのか？ 柔道と体操、一番違うのは周囲の見る目です。柔道は金が当たり前と誰もが思っている。でも体操はメダル候補にも挙がらない。言い方を変えれば、体操にはプレッシャーがないのです。僕は様々な場面で『体操は金メダルを目指しています』と発言して、周囲の見方を変えてもらえるよう努めました。自分たちを追い込んで、それをバネに頑張ろうとしたんです。キャプテンとして一番取り組んだのは、こうした環境づくり、空気づくりの点でした」

どん底からの復活



団体での金と個人(鉄棒)での銅、アテネで2つの栄冠を手にし、次は北京オリンピックだと新たな一歩を歩み始めた米田さんは、思いもかけな



▲アテネ五輪では団体での金メダルに加え、個人種目別の鉄棒でも銅メダルを獲得
PHOTO KISHIMOTO / amanaimages

いケガに次々と襲われます。体操選手には致命的ともいえる右肩、左手薬指の手術を経験し、“再起不能”を危ぶむ声も多くありました。それでも米田さんは懸命にリハビリや練習に励み、折れそうになる心に鞭打ち、2007年の社会人選手権個人総合5位というかたちで復活を果たしたのです。

「ケガをして、手術をして、いろいろなことを考えました。なぜ金メダルが取れたのか、なぜケガをしたのか。メダリストとして、与えられた使命とは。今やるべきことは…。結論は、次の北京を目指している姿を同じように苦しみながら頑張っている人たちに発信して、勇気を与えることじゃないだろうかというものでした。ブログを始めたり、復帰の過程を長期にわたってテレビ取材して



▲鉄棒での美しい離れ技
PHOTO KISHIMOTO / amanaimages



◀ 体操教室で
子供たちに指導する米田さん
© TSUNEO MORONAGA

もらったのもその一環です」

北京オリンピックの選手選考を兼ねた2008年のNHK杯。結果は個人総合8位に終わり、二度目のオリンピック出場はなりませんでした。ところが、米田さんはご自分のブログでこの日の演技のことに触れ、「体操人生最後の日に、最高の演技ができました」、「めっちゃやりきりました。めっちゃ満足しました」とコメントしているのです。

「北京を目指す過程で、悩み、苦しみ、自問自答する中で一つ決めたことがあります。それは、1日1日を頑張り、最後まで絶対に諦めないということ。正直、北京に行けなかったらどうなってしまうんだろうとか、アテネでメダルを取ったことが無になってしまうんじゃないだろうとか、いろいろな葛藤がありました。でも、NHK杯で最後まで戦い抜くことができ、厳しい状況の中で自分の持っている力を存分に発揮できた、頑張れた、そう実感できたらいきなり充実感に包まれたのです。自分の中で素直に“超えた”と思えました。すべてやりきりました。最初から北京の先はないと思っていましたから、行けなくなった時点で現役引退にもすんなり踏み切れました」

日々の練習とメンタル力



アスリートも演奏家も、高いレベルを目指すには、毎日の練習が不可欠。米田さんは、日々の練習を小石の積み重ねに例えます。

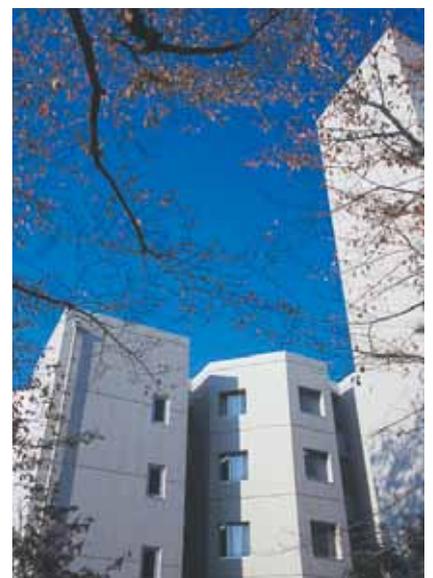
「目標に向かう中で、大きな壁を乗り越えたと感じる事ができれば確かに充実感は得られるでしょう。でも僕自身のことでいえば、壁を乗り越えてきたという実感はありません。気分が乗らない日でも練習する、雨の日でも練習する、寒くても練習する、結局はそんな小石の積み重ねの先にしかゴールはないのではないのでしょうか。毎日の練習を継続すること、繰り返すことがゴールにつながると信じて頑張ることが大切です」

現役引退後、米田さんはメンタルトレーナーとしての活動もスタートさせています。結果を残すには、身体の技術の習得は言うまでもなく、メンタル面を磨くことも必要だと説きます。

「僕のようにあまり緊張しない人、すぐに緊張する人、いろいろな人がいますが、どちらもそれなりに良い点があります。大切なのは、緊張す

る、しないにこだわらないこと。失敗したらどうしようは未来のこと、前はこんな失敗をしたというのは過去のこと、目を向けるべきは“今”なのです。今のことに集中できないから無用のプレッシャーを感じるわけです。今やるべきことは、緊張に怯えるのではなく、今に集中することなのです。

そもそも緊張やプレッシャーの捉え方が問題。時にプレッシャーは力になるし、ある程度の緊張は誰にとっても当たり前のことです。考えるべきは、それを前提にどうしたら結果が出せるかということ。そこで大切になってくるのは、日頃からどれだけプレッシャーを掛けた練習ができるか。練習に限らず、例えば文化祭等で積極的に人前に立つとか、あらゆるところで本番を想定した局面を体験するようにしたらどうでしょう。考え次第で、何でもないことでもメンタルを磨くチャンスになります。この他、既に皆さんやっていることでは、お守りを持つ、カツ丼を食べて験を担ぐなど、どんな小さなことでも自分のモチベーションをアップさせ、不安を解消することに役立つなら活用すると良い



▲ 武蔵野音楽大学入間キャンパス

でしょう。要するに何事もポジティブに捉え、日常的に肯定感を持ちメンタルの安定を維持するよう努めることです」

失敗を恐れず チャレンジ



最後に、様々な試練を乗り越えて充実の体操人生をおくれた米田さんだからこそ発信できる、我々音大生へのメッセージをいただきました。

「夢を叶えていく過程で、弱気になったり、自分の無力さを感じたり、立ち止まってしまうようなことが必ずあるでしょう。でもそんな時に、『こんな自分はダメだ』とは決して思

わないこと。『前には進んでいないかもしれないけれど、今日一日頑張れた』、『今日もなんとか踏ん張れた』というように、どんな時でも自分を肯定してあげることが大切です。周りとの比較ではなく、自分で自分をきちんと評価してあげるようにしましょう。繰り返しますが、一歩一歩の積み重ねが先につながるんです。一歩でも進んだ自分を認め、その先にゴールのあることを信じて諦めず頑張ることです。

そして失敗することを恐れないで欲しいですね。成功すれば嬉しいけれど、成功から何かを学ぶことはなかなか難しいんです。失敗すれば悲しいし、感情的に落ち込むけれど、失敗からはたくさんのことが学べます。積極的に失敗を受け入れるくらいの気持ちで、何事にもチャレンジしてください。失敗が好きだ、と言

えるくらいになってください。どんどんチャレンジして、どんどん失敗する、そしてその失敗から次につながるものをつかみ取る。失敗を糧にして、夢に向かって一歩一歩進んで行ってください」



▲江古田キャンパス



ヴィルトゥオーソ学科新人演奏会

平成22年6月14日 津田ホール



▲小林麻里(ヴァイオリン)



▲石澤洋平(オーボエ)



▲清水 綾(ピアノ)



▲波佐間成美(ソプラノ)



▲前田菜々子(ピアノ)



▲清水綾子(ピアノ)

ベートーヴェンホール 落成50周年

～創立者 福井直秋先生の夢の結実から半世紀～



直秋先生(右)とケンプ氏

武蔵野音楽大学の象徴である江古田キャンパスのベートーヴェンホールが、今年、落成からちょうど50周年を迎えました。1,085の客席と4,140本のパイプ群からなるパイプオルガンを備えたこのわが国初の本格的なコンサートホールの完成は、「学生諸君に本物の音楽堂での響きを体験させたい」と願った、学園の創立者 福井直秋先生の夢の実現そのものでした。

音響面へのこだわり

1929年(昭和4年)、武蔵野音楽学校としてスタートした武蔵野音楽学園。創立者 福井直秋先生の武蔵野音楽大学校舎整備・改築の最終目的であり、その80有余年の生涯の集大成がコンサートホールの完成でした。「完璧なコンサートホールを持たずして、なにが音楽大学だ」との思いを密かに抱いていたのです。

このコンサートホールは、ソロはもちろん、オーケストラ演奏や簡単なオペラも上演できることを目指しました。本格的パイプオルガンの設置も直秋先生の念願であり、その工事はさまざまな面で日本初づくし。

そもそも当時、日本にはコンサートホール建設の参考となる設計資料

はほとんどなく、唯一、神奈川県立音楽堂が完成していたものの、まだ資料としてまとまっていたわけではありません。もちろんオルガン設置に関する資料も皆無、オルガンメーカーのドイツ・クライス社の指示を待つしかなかったのです。

さらに苦勞したのが、オペラ対応へのアプローチ。熟慮のうえ考えだされたのが、緞帳でプロセニウムを作るというアイデア。オケピットは舞台の一部を迫りとして使い、ライトや背景などの釣り物は、天井の音響反射板に開けた穴を通して人力で吊り上げるという原始的な方法が採用されました(後に電動式に改良)。結果的に建設を担当した大林組の設計部は設計完成までに1年半、工事に2年も要する大プロジェクトとなりました。

さらにホールの良否を決める音響面にもとことんこだわり、世界的水準の実力を持つNHK技術研究所音響研究部の全面的な協力を仰ぎました。当初は1,300席に予定されていた客席を1,111席(現在では1,085席)に縮小したのも、すべて音響面への配慮からでした。

楽聖の名を冠したホール

この工事の実行委員長であった守田貞勝氏は、こう語っています。「音楽ホールの音響は、ホール内のどの座席で聴いても音がよく届き、反響に煩わされることなく、演奏された音楽に豊かさと輝きを加えるように、高・中・低各音域の残響が調整され、しかも音の歯切れのよいのが理想です。ベートーヴェンホールは、この

理想にごく近いものと言えます」と。

1960年(昭和35年)10月15日、竣工式の席で直秋先生は、「私はここに、大ホールをベートーヴェンホール、小ホールをモーツァルトホールと命名いたします。これは世界共有のこの二大巨匠の崇高な芸術性と不撓不屈の精神、果てることのない魂の発展を偲び、ここに学ぶ学生諸君が少しでもこれにあやかっただけの発意からであります。私は学生諸君がこのホールにふさわしい演奏ができるよう、今後一層精神の陶冶と技術の錬磨に精進されることを切望いたします」と述べました。

前後してクライス社で設計図が描かれた大パイプオルガンは、約1年の月日をかけてドイツで製作され、1961年4月日本へ向け出荷されました。横浜港に荷揚げされたものの、部品があまりにも多く、多量だったため、それは武蔵野音楽大学に直送され、税関は大学に係員を派遣して荷ほどきをしたほどでした。そしてこの組み立てには、クライス社の技師2名と日本楽器製造株式会社の技師、大学関係職員が協力してかかり、2ヵ月以上もの日数を要しました。

ホールに咲いた友情

1961年(昭和36年)10月7日、パイプオルガン披露式および記念演奏会の日を迎えました。式には、義宮殿下、秩父宮妃殿下を始め、各国大使、公使、音楽関係者、学園の教授、学生が列席。この日のためにはるばるドイツから来日した、巨匠ウィルヘルム・ケンプのパイプオルガン記念演奏



▲ベートーヴェンホール外観

で始まりました。バッハ「オルガン前奏曲 変ホ長調」、「モテット 混声合唱と継続低音オルガン『主を讃えよ 諸々の異邦人』」——4,140本ものパイプを持つオルガンの奏でる雄大かつ繊細な音色に、列席者から嵐のような拍手がわき上がりました。

ケンプは次の言葉を祝辞として直秋先生に贈りました。

「神の声、それはオルガンであり、オルガン以外のいかなる楽器でもありません。ギリシア語の言い方がすでに示すように、いわば創造主によって組み立てられた楽器であり、また秩序のシンボルであります。オルガンは楽器の女王なりと巷間よく言われますが、まったくこの言葉は正しく使われた一語です。オルガンの持つ輝かしい本性をなんらかのやり方で傷つけるのは、王位に対する侮辱であり、また神への中傷でもありましょう。

尊敬する福井学長、福井家の皆さん、教職員諸氏、卒業生、在学生の諸君、皆さん一緒にこの新しいオルガンをこの立派なホールで聴きながら、今日の輝かしい瞬間の喜びを分かち合おうではありませんか！ 高齢の身で生涯の業績の最高峰を経験できることは、実に素晴らしいことであり、その素晴らしい人物の一人はここにいらっしゃる福井学長です。福井学長の御多幸を祈りながら」



▲ ベートーヴェンホールにて挙行された学園創立80周年記念式典(2009年12月4日)

二人の音楽の巨人の美しい友情と深い信頼の姿を、ここにはっきりと見ることができます。

落成50周年記念演奏会

W.ケンプの他にも、G.ムーア、K.リヒター、H.ケラー、P.コシュロー、H.ロイター、V.ベルルミュテル、L.オボーリン、H.ホッター、I.スターン等の錚々たる演奏家のコンサートが多数開催され、いずれからも高く評価されているこのホールは、学生にとっても憧れの的であり、本学の教育に大きく寄与してきました。

今では各地に、多くのコンサートホールが建てられていますが、その嚆矢となったベートーヴェンホールの伝統は、50年間変わらずに受け継がれています。そして、この度ホール落成50周年にあたる今年10月15日、右のプログラムで記念演奏会が予定されています。

ベートーヴェンホール 落成50周年記念 “ベートーヴェンの夕べ”

平成22年10月15日(金) 18:30開演

江古田キャンパス
ベートーヴェンホール

ピアノ・ソナタ 第21番
ハ長調「ワルトシュタイン」Op.53
ピアノ：可児亜理

ゲレルトの詩による6つの歌 Op.48
バリトン：谷友博
ピアノ：三ツ石潤司

ヴァイオリン・ソナタ 第5番
ハ長調「春」Op.24
ヴァイオリン：クルト・グントナー
ピアノ：藤原由紀乃

五重奏曲 変ホ長調 Op.16
オーボエ：荒巻友利恵
クラリネット：十亀正司
ホルン：丸山 勉
ファゴット：岡崎耕治
ピアノ：ジョン・ダムガード

ベートーヴェンホール豆知識

建築と音響のコラボレーション

ベートーヴェンホール建築の基本計画に携わったのは、アントニン・レイモンドのもとで当時のリーダー・ダイジェスト日本支社ビルなどを手がけた大林組の土橋民祐氏。音響設計を担当したのは、後にサントリーホールや東京芸術劇場の音響設計に関わったNHK技術研究所音響研究部の永田穂氏。建築と音響の共同作業のコンセプトは、わが国初の「音響そのものを建築の形として実現し、楽器としての音楽堂」を造るというものであり、音響的目標はヨーロッパ芸術音楽の原点とも言われる古典主義時代の響きの再現でした。

重低音域の残響時間3秒

設計段階でのベートーヴェンホールの残響時間の目標値は低音で2秒(重低音で3秒)、中高音で1.6秒とされ、それはほぼそのまま実現されました。重低音域での残響時間3秒は、「オルガンの低音を十分に受け止めてくれる響き」であり、演奏者も、聴衆も、全く同じ音楽の空間を共有することができる理想的な数値です。以後、パイプオルガンを設置するホールの音響設計の良き手本となり、現在までに全国各地に建設された音楽堂の設計に大きく貢献しています。

パイプオルガンのリフレッシュ

これまでに耐震工事でロビーの全面改修工事が行われてきたベートーヴェンホール。設置されているパイプオルガンも、昨年、学園創立80周年を期して大規模なオーバーホールが実施されました。ドイツ人マイスターが3人がかりで11週間にわたって行った今回の作業では、ネオバロックスタイルにフランス趣味の音色を加味した伝統の響きをリフレッシュするとどまらず、8,000種類の音の組み合わせが可能なデジタルメモリーが新たに付設され、一層多様な表現が可能となりました。

ピアノが好き！ 教えるのも大好き

● 樹原涼子 (作曲家) ●



樹原涼子 きはら りょうこ

熊本市生まれ。東京都立雪谷高等学校、武蔵野音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒業。ピアノを八戸澄江、故有馬俊一、白石百合子の各氏に、ジャズピアノ、編曲、音楽理論を故八城一夫氏に師事。1991年より順次出版されたピアノ教則本『ピアノランド』は、多くの子どもを教えた経験を生かし、ベスト&ロングセラーとなり高い評価を得ている。現在、作曲、執筆、歌手活動のかたわら、セミナー、コンサート、公開レッスンを通じて、ピアノ教育界に新しい提案と実践を続けている。著書に『ピアノランド①～⑤』をはじめシリーズ15冊、また『ピアノを教えるってこと、習うってこと』(以上音楽之友社)、『いきなり&もう一度！ 才能以前のピアノの常識』(講談社)、『樹原家の子育てーピアノランドと笑顔の毎日ー』(角川書店)など。



▲ ピアノランドフェスティバルより、2010年8月大田区民ホールアブリコホールにて(以下同じ) 左:小原考さん 右:樹原涼子さん

ピアノランド・メソッドが誕生して、来年で20年。この間シリーズの教則本15冊、すべてオリジナル曲で「ピアノランド」の5冊だけでも113曲。発行総部数は170万部。大ヒット商品からロングセラーへ仲間入りし、今ではバイエルに匹敵した日本のピアノ教育界に定着。このピアノランド・メソッドを創造し、すべての曲を書いたのが、武蔵野音楽大学ピアノ専攻卒業の樹原涼子さん。

2010年8月ピアノランド・フェスティバル全国ツアーを終えられた直後に、お話を伺った。

教えるのが好き

学生時代から小学生にピアノを教えていた樹原さん。「こうしたらどう」と教えて、どんどん上手になるのが楽しかった。できない所を見ると、次にどうしたら良いか、教える側が何をしたら良いか、子どもたちが見せてくれている。それに応えようとどんどん上手になる。できないことは生徒によって違うから、ノウハウはどんどん増えていく。

しかし順調にばかり行ったわけではない。「バイエル」で教えはじめ、だんだんと上手になると信じていたが、次ページへ進むこともできず、やる気をなくした生徒たちを前に、暗礁に乗り上げ、戸惑い焦ってしまった。

そこで考えたのが三つの仮説。

1. 教え方が悪いために生徒の飲み込みが悪い。
2. 生徒の努力が足りない、力が足りない、ピアノに向いていない。
3. 使っている教材が生徒に合わない。

おそらく、どれか一つが原因というより、どれもが原因となっているに違いない。

で、ピアノを教えるためには、音楽を好きにしなければならぬ。そのためには、

1. 先生を好きになること。
2. はじめから音楽を、メロディ・リズム・ハーモニーを一体として教える(提供する)。まず先生がお手本を弾く(聞かせる)。
3. 先生は音楽のパートナーとしてリズムやハーモニーをつけてあげる。音楽の共有(連弾)で教える。そのための教材が必要ではないか。日本の子どものためには、日本のメソッドが必要ではないか。

誕生した ピアノランド・メソッド

幼児のレッスン方法として気をつけていることは、

1. 悪い癖は直すのではなく、つけないこと。指先が鍵盤に触れる部分をタッチポイントと名づけて、タッチポイントで弾く美しいフォームをつくる。
2. ピアノを弾くのに必要な四つの力は、楽譜を見て、脳が指令を出して、指をコントロール、その音を耳が確かめつつ、目は次の音符を追いかけ、という連続した力。それは第一段階として、まずピアノに触れさせずに準備期間とする。それができるようになって、はじめて第二段階でピアノを弾くようにする。
3. 心をつなぐカウンセリングレッスン。ピアノは、教える人と習う人の

心をつなぎ、同時に作曲家、演奏を聴く人との心をつなぐ芸術。また、自分の考えを持つためにも、自分のために弾く生徒をつくるためにも、一人一人を伸ばすためにもカウンセリングレッスンを大切にする。

4. はじめから音楽をまるごと習わせる。初心者は一人でメロディ、リズム、ハーモニーを奏でられない。そこで先生との連弾。まるごと音楽を学べると共に、先生は音楽のパートナーとなる。そして常に歌いながらレッスンをする。

これが樹原さんの作ったピアノランド・メソッドの考え方。

すべてが音楽のために



ピアノランドの最初の教則本5冊を発行したのは1991年。出版直前には二人の男の子を年子で出産。産院にも楽譜を持ち込んで作曲したほど。しかも年に60～70回もセミナーを各地で開く忙しさ。

武蔵野を卒業してから、アニメソング、ゲーム音楽、コマーシャルなどの作詞・作曲、演奏、ジャズダンスのインストラクターまで様々なことに



▲子どもたちと一緒にピアニスト体操

チャレンジ。そして自身のコンサート。常にすべてのことを全力でやってきた。あまりに多忙で、夜眠るとき、横になると疲れのため、ただ涙がこぼれることも。結局どれかを選ばなければ、身体がもたない。

ピアノが好き、歌うことも、作曲するのも、教えるのも大好き。小さい頃からピアノを友達にして、いろいろな想いをピアノに向かって打ち明け、相談したり励まされたり、なくさめられてきた樹原さんが、最終的に選んだのがピアノを教えること。

教えるとなればそれに集中して、



▲カラフルで楽しい教則本

新しいメソッドの体系も整えてしまった。

生徒たちは一人一人が違う。個性も違えば、レベルも違う。教え方もそれぞれ違うべきだし、練習する曲も違わなければならないはず。この子にはこういう曲が良いのではないかと考え続け、音楽のことでいつも頭は一杯。夢の中でも作曲をしているような状態だった。こうして教えるノウハウや曲は増えていった。

音は天から降ってくる。その音を自分を通して子どもたちに伝えていくこと。大変な作業だが、同時に最大の楽しみでもあり、サラダを作るように子どもたちのために曲を作った。

凝り性な性格で、分析することも大好き。しかも、アイデアやノウハウが集まれば、それを体系化しないと気がすまない。ピアノランド・メソッドは樹原涼子という音楽家がい

・音・楽・余・話・音楽好きの文豪 トーマス・マン

「小説中に述べられた十二音技法もしくは音列技法は、実際はアルノルト・シェーンベルクの知的所産であって、私がそれを小説の主人公に転用したのであり…この書物に書かれた音楽理論の詳細は、シェーンベルクの和声学に負うところが多い。」*とは、ドイツの文豪トーマス・マン晩年の大作《ファウストゥス博士》の末尾に付けられた、作者自身による注釈である。

物語の主人公アドリアン・レーヴァーキューンは、トーマス・マンが創作した架空の作曲家であるが、この人物が音列技法を考案したように取られかねない筋書きに対し、シェーンベルク

クが遺憾の意を表明したことから、後の第二版以降にはこの釈明が付記されることになったのである。さらに、その釈明の内容が、意外に簡素なものであったということで、シェーンベルクがまた新たに憤慨するなど、その後も両者の確執はしばらく続いたようである。が、これも元はと言えば、とりわけ音楽への造詣の深かったトーマス・マンが、音楽を語るに際していかに優れていたか、その卓越性に端を発していたとも言えよう。

《ファウストゥス博士》に限らず、マンの著作一般には、音楽に関して、音楽家あるいは音楽理論家にしか書き得ないような詳細な記述が多い。多く

の作品において、さまざまな和声や楽節、あらゆる楽器の音色や管弦楽法、また時にはベートーヴェンやワーグナーを始めとする巨匠たちの楽曲そのものが、まるで耳に聴こえてくるように描かれているのは実に興味深い。

日本では、秋は読書の季節であると聞く。音楽を学ぶ学生諸君には、世界文学の中でも、こうした音楽とかわりりの深い名作に接することをお勧めしたい。

*《ファウストゥス博士》あとがき要約
(訳：重松万里子)

コンスタンティン・ガネフ
(本学客員教授)



▲ 右より樹原涼子さん、ご子息、小原孝さんの3連弾

て、生まれるべくして生まれてきたのかもしれない。

CMソングの作曲やスタジオでの経験は音楽業界のことを。ジャズダンスはリズムを身体で表現することを。あるいは姿勢や関節を柔らかくし、ピアノを弾く筋力を付けるなど、結局すべての経験がピアノを教えることに相乗効果があり収斂され、生徒のために連弾で歌詞付きのオリジナル教材を作り始めて、ピアノランド・メソッドに結実していった。

自分の中に自分を探す



小学生の頃から作曲をし、高校ではバンドを組みCDデビュー。最初から音楽家になることを夢見ていた。そんな中で武蔵野の4年間は、クラシックだけに集中、そういう時間を持った、そういう時代があったこと

は、貴重な財産になっている。

学生時代は友達にも先生方にも大きな影響を受ける。影響を受けつつも自分を見失わないことが大切。自分探しという言葉が使われるが、探さなくても自分はそこにあるのだ。

外に情報を求めるのではなく、自分を見つめて、自分の心の声を聞くこと。自分ができることを意外に本人は気づかず、あっさり諦めてしまったりもするが、自分が本当に何をしたいかは、外にはない。自分の中にある。周りの人の意見を聞いて生きて行くのは楽だが、自分の中の声を聞いて生きて行かないと、なんのために生まれてきたのか解らない。

自分のよい所を自分で見つけてあげること。自分を否定しないこと。自分を愛することが大切だと思う。自分は人と違って生まれてきたのだから、人と違う自分を愛すること。同時に、他の人を自分と違うからと否定しない。自分と同じ価値観を持っている人の方がまれ。良い悪いではなく、他の人はそのまま受け入れる、そして自分は自分であることが大切。その一点において樹原さんは強く、ひたむきだった。

現在、ピアノ指導者としてセミ

ナーや公開レッスンを開催し、大学での特別講義も行っている。作曲家、歌手、演奏家、執筆家など様々な肩書きを持つが、全体として音楽家とでもするしかない多方面での活躍ぶりである。しかし、自分では「作曲家」が一番びったりくるといふ。子育ての手も離れる時期にきた。これまで大きな時間を掛けてきた子育ての時間を、自分のアーティストとしての時間に振り向けていきたいという。

朝から晩まで音楽漬けの人生の中で、もちろん立ち止まらなければならないことも、悩まなければならないこともあった。しかし、悩みというのは、悩んでいけばますます大きくなる。悩むことに時間を掛けない、問題があれば方向を変えてやってみる。悩む時間があれば、ピアノを弾くのだ。

来年はピアノランド・メソッド20周年。今年4ヵ所で開いた全国ツアーを、全国8ヵ所で開き、希望する生徒たちから100人を舞台に上げて100人の連弾ができないだろうか。樹原さんのエネルギーは強くなるばかりだ。

※2010年8月インタビュー。この文章はインタビューと樹原さんの著作からまとめたもので、文責は編集部にあります。

音楽の万華鏡 13

異国の音楽を伝えることは命がけ

現在、日本に、遠く離れた西洋の音楽が普及しているのは、明治維新以来の日本人が熱心に西洋の音楽を学び、またそれを子どもたちに教え続けた結果と言えるでしょう。滝廉太郎や山田耕筰などははるばる海を越えて現地に赴き、また彼の地からは音楽家が日本に招かれて、まったくの異文化であった西洋の音楽が伝えられたのです。

明治時代を遡ること1000年余、8世紀から9世紀の日本にはそれと似たような状況がありました。当時東アジア圏で圧倒的

な強さを誇っていた唐。その都長安では、広大な領土の内外から様々な音楽がもたらされ、国際的な音楽シーンが繰り広げられていました。アジア辺境の小国日本としては、唐と上手に付き合っていくことが外交上の至上命題でしたから、遣唐使を送り、国を挙げて唐の制度や文化を学びました。そしてその一環として国際色豊かな雅楽が日本にもたらされたのです。

遣唐使は唐の国状が不安定になる9世紀の末まで続きますが、その半世紀前、承和3年(836)年の第15回遣唐使は日本の音楽史上特に重要です。このとき音声長に任命されたのが平安時代前期を代表する音楽家、大戸清上おおとのきよかみでした。清上は大変な笛の名人で、朝廷の雅楽寮に勤め、いくつもの名曲を作曲しました。承和元年の正月に仁寿殿で行われた内宴のよりの笛の演奏があまり

に素晴らしかったので、その功績によって従五位下に昇進します。宮廷音楽家の身分は「地下」といって通常は従六位止まりでしたが、清上は、宮中に入り出ることができる殿上人の位にまで昇進したことになります。

さて、第15回の遣唐使には、天台声明の礎を築いた円仁や、盛唐の技法を日本に伝えた琵琶の名手、藤原貞敏など、優れた音楽家が参加していましたが、清上自身は、帰路、南海の小島に流され、そこで賊に襲われて命を落とすと伝えられます。

滝廉太郎も、留学先のライブツィヒで肺結核を発病、帰国は果たしたものの、短い一生を終えることとなります。海のかなたから音楽を伝えることは、平安の昔も明治の時代も命がけだったのです。

藤田治子(本学音楽学教授)

ウィンドアンサンブル & 管弦楽団 定期演奏会 / 演奏旅行

去る7月、武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル一行が九州へ演奏旅行に出かけ、6日に鹿児島県の宝山ホール(鹿児島県文化センター)で、8日には福岡県の北九州芸術劇場 大ホールで公演を行い、さらに16日、東京オペラシティ コンサートホールで定期演奏会を開催しました。

今回の指揮者には、米国よりセントクラウド州立大学のリチャード・K.ハンセン教授を招聘。オープニングは、L.ヤナーチェクの《シンフォニエッタ》の「ファンファーレ」を金管セクションが透明感ある鮮やかなハーモニーで飾り、続いて、作曲家のイアン・クラウス氏を客席に迎えて、日本初演となる“クロニカ Op.B”を披露。2010年度全日本吹奏楽コンクール課題曲、A.ヒナステラのバレエ音楽《エステンシア》より「マランゴ」、W.ウォルトンの戴冠行進曲《王冠》、S.メリロのザ・チョーセンなどハンセン教授ならではのバラエティ豊かな選曲で、木管セクションの柔らかく緻密な調べ、打楽器セクションの躍動的なパフォーマンスも披露され、会場に集ったたくさんの聴衆から万雷の拍手が寄せられました。

また、演奏旅行期間中に、地元の中・高校生を対象に開催したクリニックには、約80名の参加者と100名以上の見学者が集まり、パートごとに分かれて学生による指導やハンセン教授自身の指導で合同合奏が行われ、学生、参加者ともに充実した一日となりました。

9月には、武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会が開催されました(9月8日:本学入間キャンパス バッハザール、9日:東京オペラシティ コンサートホール、12日:香川県県民ホール「アルファあなぶきホール」、13日:高知市文化プラザかるぼーと)。

北原幸男本学教授の指揮によるプログラムは、ベルリオーズ:「ローマの謝肉祭」序曲、幻想交響曲、ショパン:ピアノ協奏曲第1番。ピアノ独奏では、本学学生オーディションで選ばれた、野上 剛(大学4年)、青木佑磨(大学3年)が、ショパンの繊細さと力強さを兼ね備えた曲想を華やかなテクニックで清々しく響かせ、また幻想交響曲では、色彩豊かなオーケストレーションを見事に表現して会場を沸かせました。



▲ ウィンドアンサンブル演奏会

● 表紙の顔



金 昌国さん

東京藝術大学、同大学大学院修了。日本音楽コンクール第1位入賞。1969年ジュネーヴ国際音楽コンクール第2位入賞(1位なし)。⁷⁰年より10年間、ドイツ・ハノーヴァー国立歌劇場管弦楽団の首席奏者を務める。その間、日本、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの各地でオーケストラとの共演、リサイタル、音楽祭等でフルート独奏者として活発に演奏する。⁸¹年に帰国。東京藝術大学教授として本年3月まで務めた。

一方、⁸⁶年にアンサンブル of トウキョウを結成。指揮活動も始め、多彩な演奏活動を続けている。またミュンヘン、ブダペスト、ニールセンなどの国際コンクールの審査員をたびたび務めたほか、神戸国際フルートコンクール、大阪国際室内楽コンクール、日本音楽コンクール、日本木管コンクールの審査員、併せて運営にも携わる。

現在、武蔵野音楽大学特任教授、韓国国立芸術大学招聘教授、東京藝術大学名誉教授。アジアフルート連盟会長。

【今後の音楽活動】

- ◆ 10月15日・12月15日
2011年4月12日・7月1日
アンサンブル of トウキョウ 定期演奏会
(フルート、指揮) / 紀尾井ホール
- ◆ 2011年1月30日・7月13日
さいたまアンサンブル 定期演奏会
(指揮)
/ 彩の国さいたま芸術劇場(1月)
/ さいたま市文化センター(7月)
- ◆ 2011年7月15日～25日
ヨーロッパ演奏旅行(モンテネグロ他)



▲ 管弦楽団演奏会(東京オペラシティ コンサートホール)

名演が続いた前期公開講座・演奏会シリーズ

本年前期の演奏会シリーズ、後半に入っても多彩な顔ぶれが揃い、いずれ劣らぬ名演を聴かせてくれました。

まず、大阪フィル、バンクーバー交響楽団等でコンサートマスターを務め、幅広いレパートリーで世界的に演奏活動を行っているロバート・ダヴィドヴィッチ(本学客員教授)のヴァイオリン・リサイタルが6月24日、江古田キャンパス、ベートーヴェンホールにて開催されました①。プログラム前半はブラームス、シューベルト、さらにショーンソンの詩曲、ラヴェルのツイガースと、ヴァイオリンの魅力をつぶりと聴かせた後、第2部ではショーンソンのピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲 ニ長調 Op.21が演奏されました。演奏される機会が少

ない作品ですが、叙情的なメロディと繊細な和声美しく響き、見事なアンサンブルと相まって名演となりました(ピアノ:岡崎悦子、ヴァイオリン:増田加寿子、佐野貴昭、ヴィオラ:鍛冶光恵、チェロ:山崎みのり)。

続く7月1日には同じくベートーヴェンホールにおいて今人気のピアニスト、ケマル・ゲキチ(本学客員教授)のピアノリサイタルが開催されました②。本学にはもうお馴染みの教授ですが、今回はベートーヴェン交響曲第5番「運命」第1楽章とベルリオーズ幻想交響曲の第4、第5楽章のリスト編曲が始まるという、アグレッシブなプログラム。オーケストラを凌駕するような迫力で演奏し、聴衆を圧倒しました。後半はフランクの前奏曲、コラールとフー

ガを美しい音色で弾き、さらにプロコフィエフのピアノ・ソナタ 第7番をスピード感溢れるテンポで力強く演奏。聴衆から熱い拍手が鳴りやまず、アンコールにはショパンの英雄ポロネーズなど名曲を数々披露して、その汲めども尽きぬ高い音楽性と名人芸的なテクニックに、会場では感嘆のため息が漏れました。

7月9日には、武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会がベートーヴェンホールで開催されました③。この管弦楽団は本学の学生と若い卒業生をメンバーに、ミュンヘン・フィルやパイロイト祝祭管弦楽団などでコンサートマスターを務めたクルト・グントナー(本学教授)の指揮・指導で研鑽を積んでいます。プログラムは、まずモーツァルト「カサシオン」第2番 変ロ長調 K.99(63a)、その後学内オーディションで合格したフルートの野勢寛樹(本学3年)の独奏で、バッハの組曲第2番口短調 BWV1067が爽やかに演奏されました。そしてチャイコフスキーの「弦楽セレナード」が高度なアンサンブルと情熱的な表現で見事に弾かれ、万雷の拍手が。アンコールではヨハン・シュトラウスのピッチカートポルカも演奏されて、楽しい雰囲気うちに終了しました。



バーバラ・ボニー、ステファン・マクラウドによる 声楽公開講座

9月2日、ステファン・マクラウドバス・バリトンリサイタルが、本学モーツァルトホールで開催①。ドイツとフランスの歌曲によるプログラムで、マクラウド氏の温かく柔らかな声と、国立ケルン音楽大学で氏と共に学んだ子安ゆかり本学講師の息の合ったピアノが、歌詞の内容を叙情的に表現し、まさに音楽と文学の融合ともいえる魅力的な歌曲の世界を繰り広げました。

続く9月5日、世界的ソプラノ歌手、バーバラ・ボニー女史が来学し、ベートーヴェンホールで声楽公開レッスン②。受講生は、杉山由紀(本学大学院修士課程修了)、込山由貴子(同2年)、波佐間成美(同ヴィルトゥオーソコース1年)の皆さん。通訳とピアノ伴奏は、コレペティトールの三ッ石潤司本学教授が務めました。

発声法、また感情表現や曲の解釈などを具体的に指導され、幅広いレ



パートリーと輝かしいキャリアを持つ女史ならではの、素晴らしい講座となりました。中でも「楽曲の歌詞、内容を、いかに自分の個性を生かして相手に伝えることができるか、そ

して聴衆との心の対話があってこそ初めて良い演奏になるのだ」、とのアドバイスが大変印象的でした。最後の受講曲、R.シュトラウス「ばらの騎士」からの三重唱では、女史自身

の十八番でもあるゾフィー役のパートを受講生と共に歌い、超満員の会場から感動の声と割れんばかりの拍手が送られました。

第16回国際サマースクール・イン・トウキョウ終了

受験講習会や社会人、教員のための講座や講習と並び、武蔵野の夏の恒例イベント“武蔵野音楽大学国際サマースクール・イン・トウキョウ”が、7月19日～29日の11日間、本学江古田キャンパスで開催され、第16回目となる今回も音楽を志す多くの受講生が参加しました。

指導者には、A.v.アルニム、I.イーティン、A.セメツキー①、N.トゥルーリ(以上、ピアノ)、U.ヘルシャー(ヴァイオリン)、松本美和子、堀内康雄②(以上、声楽)、そして今回初招聘のM.モラゲス③(フルート)の豪華メンバーが勢揃い。レッスン内容は、すべて通訳を介して的確に伝わるように配慮され、技術はもちろん音楽的な背景や解釈など、世界で活躍する経験豊かな講師陣ならではのレベル

の高いレッスンが繰り広げられました。

また、期間中にはイーティン教授がシューベルトの幻想ソナタ、ラフマニノフの前奏曲をプログラムにピアノ・リサイタル④を、そして、ヘルシャー(ヴァイオリン)&フォン・アルニム両教授(ピアノ)が、それぞれソロのプログラムも組み入れたデュオ・リサイタルを開催⑤。各氏の卓越した演奏が、聴衆に深い感銘を与えました。

さらに、トゥルーリ教授が「ピアノ奏法に不可欠な要素」をテーマに音楽セミナーを実施⑥(通訳：正村和子氏)。聴講者はこれからの勉強へのヒントを得ようと、真剣な眼差しで聴き入っていました。

この他、先生方との懇談会では、レ

ッスン室での緊張感のある様子とは一転し、和やかな雰囲気での交流を深める姿があちらこちらで見られました。また、最終日には受講生が11日間の成果をコンサート形式で披露。参加者は日本に居ながらにして海外に短期留学したかのような、かけがえのない意義深い夏を過ごしました。



平成23年度から大学別科を再開

平成23年度から、大学別科の募集を再開します。実技の個人レッスン(器楽・声楽・作曲・指揮の4コース)と基礎的な関連科目(音楽理論、西洋音楽史)を学修し、その向上を図ることを目的とします。

入学資格は、高等学校卒業以上で、音楽の技術および知識のレベルアップを目指す幅広い年齢層を対象としています。入学試験は平成

23年2月12日・13日ですが、詳細は別科入学試験要項をご参照ください。要項をご希望の方は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL. 03-3992-1125)または学園ホームページ、携帯サイトにてお申し込みください。

ホームページ：<http://www.musashino-music.ac.jp/>

携帯サイト：<http://musaon.jp/>

武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、創立80周年を記念して、福井直秋記念奨学基金、演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々からご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名(五十音順)は、平成22年5月25日から8月3日までの間にご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号に掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきます。何卒ご了承ください。

【同窓生】阿部和子様 Isumi Morrison様 榎本亜矢子様 川崎盛徳様 郡司悦子様 首藤佳代子様 田中孝子様 細川慶郎様 山本昌一朗様 山本玉枝様 昭和51年入学同期会一同様
【役員・教職員・一般・他】安孫子和子様 清野美佐緒様 宮脇郁様 (他に匿名を希望される方7名)

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

コンクール・オーディション名	部門	詳細	氏名	学年・専攻
第17回 キェイストゥット・パツェヴィチ記念 国際室内楽コンクール(ポーランド)	リートデュオ部門	第3位入賞	赤塚 太郎	平成17年大学卒業ピアノ専攻
第46回 日伊声楽コンクール		第3位入賞 入選	三戸 大久 本松 三和	平成12年大学卒業声楽専攻 平成14年大学院修士課程修了声楽専攻
第34回 ピティナ・ピアノコンペティション ファイナル	ソロ部門 特級	銅賞受賞	金子 淳	平成21年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学
第8回 堺国際ピアノコンクール	一般部門	第3位入賞	長町 順史	平成3年大学卒業ピアノ専攻
平成22年度 合唱組曲作品公募 第21回朝日作曲賞		佳作受賞	後藤 真希子	平成16年大学卒業作曲専攻 本大学院修士課程修了
第1回 日本ホルンコンクール		第5位入賞	堀 風翔	大学4年次在学ホルン専攻
第15回 JILA音楽コンクール	管楽器部門	第1位入賞	平田 彩圭	大学4年次在学クラリネット専攻
	マリンバ部門	第1位入賞 第2位入賞	長谷 翔太 市村 友紀	大学3年次在学打楽器専攻 平成21年大学卒業打楽器専攻
2010 アジア国際音楽コンクール	大学生ピアノ部門	第1位入賞	荒井茉莉奈	大学4年次在学ピアノ専攻
第6回 ルーマニア国際音楽コンクール	打楽器部門	第3位入賞	嶋崎 雄斗	平成22年大学卒業マリンバ専攻 本大学院修士課程1年次在学
第14回 PIARAピアノコンクール 全国大会	シニアC部門	第2位入賞、スタインウェイ賞受賞	平野 百合子	平成8年大学卒業音楽教育学科ピアノ専攻
	デュオD部門	アポロ奨励賞受賞	米山 恵理子 関 仁美	平成10年大学卒業ピアノ専攻 平成11年大学卒業ピアノ専攻
第12回 “万里の長城杯”国際音楽コンクール	ピアノ部門 一般Aの部	第2位入賞	川津 めぐみ	平成19年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程修了
第13回 “長江杯”国際音楽コンクール	打楽器部門 一般の部A 管楽器部門 大学の部	第3位入賞(1位なし) 優秀賞受賞	宮城島 梨恵子 山口 睦美	平成13年大学卒業マリンバ専攻 大学4年次在学フルート専攻
第8回 ブルクハルト国際音楽コンクール	管楽器部門	第5位入賞(1~4位なし)	金子 咲良	大学4年次在学フルート専攻
第4回 横浜国際音楽コンクール	管楽器部門 大学の部	審査員特別賞受賞	晝間 亜希子	大学4年次在学フルート専攻
第28回 ソレイユ音楽コンクール	声楽部門	入選	肥沼 諒子	平成18年大学卒業声楽専攻 本大学院修士課程修了
第49回 高崎新人演奏会オーディション		第1位入賞	浅見 由惟	平成21年大学卒業ピアノ専攻
第48回 北九州芸術祭 クラシックコンサート	管楽器部門 一般の部	部門賞受賞	佐々本 彩子	平成18年大学卒業フルート専攻 本大学院修士課程修了 本大学院博士課程3年次在学
第9回 滋賀県新人演奏会		優秀賞受賞	筈井 美貴	平成20年大学卒業ピアノ専攻 本大学院修士課程修了
第3回 国際ジュニア音楽コンクール	ヴァイオリンD部門	第3位入賞、伊藤楽器賞 千葉ふるさと文化大学長賞受賞	大島 弓人	附属江古田音楽教室在室 越谷市立千間台小学校5年生
第7回 草加市演奏家協会 クラシック音楽ジュニアコンクール	A部門(小学1・2年生)	奨励賞受賞	桑原 歩美	附属江古田音楽教室在室 お茶の水女子大学附属小学校1年生

着任外国人教授紹介 (平成22年度後期)



アルヌルフ・フォン・アルニム
Arnulf von Arnim (ピアノ/ドイツ)

フランクフルト音楽大学に学び、P.サンカンに師事。マリア・カナルス及びヴィオッティ両国際コンクール第1位。国際シェーベルトコンクール音楽監督を始め数々の国際コンクールで審査員を務める。レコーディングも数多く、近年、シューマンの未公開「2台ピアノのための作品」「4手のためのピアノ作品」を初収録。現在、エッセン・フォルクヴァング音楽大学教授。



エレナ・オブラスツォワ
Elena Obratsova (声楽/ロシア)

レニングラード音楽院に学ぶ。チャイコフスキー国際コンクール優勝ほか受賞多数。世界各地の歌劇場で絶賛され、オペラ歌手として不動の地位を獲得、現にも国際的に活躍中。ロシア共和国国家芸術家の称号、レーニン勲章を授与される。現在、オブラスツォワ国際声楽コンクール総裁、ムソルグスキー記念サントペテルブルク国立ミハイロフスキー歌劇場顧問。



ジョン・ダムガード
John Damgaard (ピアノ/デンマーク)

G.ヴァン・ハーリ、I.コボシュ、W.ケンブの下で研鑽を積む。デンマーク王立音楽院で助教授、武蔵野音楽大学で1979年から'81年まで客員教授を務めた後、'84年からはオーフス王立音楽アカデミーの教授に就任。世界各国で主に古典派とロマン派及びデンマークのピアノ音楽を含む作品のコンサートを行っている他、多くのコンクールで審査員を務める。



レイ・E. クレーマー
Ray E. Cramer (ウィンドアンサンブル指揮/アメリカ)

2005年まで全米で最も優れた音楽学部とされるインディアナ大学で、吹奏楽学科主任教授及びバンドディレクターとして活躍。'09年まで世界的権威のミッドウェスト・クリニック会長の要職を務め、全米吹奏楽指導者協会会長を始め数多くの要職を歴任。インディアナ大学最優秀教授賞、Phi Beta Mu 国際優秀賞など受賞歴多数。日米で客員指揮者、審査員等として活躍中。

平成22年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ

武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 指揮=ヴィンフリート・トル 独唱=ソプラノ:横山典子、バリトン:谷友博 曲目=フォーレ:レクイエム Op.48 他	10月1日(金) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
ベートーヴェンホール落成50周年記念“ベートーヴェンの夕べ” ※プログラム等の詳細はP.6をご参照ください。	10月15日(金) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
エレナ・オブラストワ メゾ・ソプラノ・リサイタル ピアノ=三ツ石潤司 曲目=マスネ:《ウェルテル》より「流れよ、涙」、サティ:エンパイア劇場のプリマ・ドンナ 他	10月18日(月) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)
ミハエル・ファウスト フルート・リサイタル(練馬区文化芸術振興支援事業) ピアノ=小池ちとせ 曲目=ライネッケ:ソナタ「ウンディーネ」Op.167、フランク:ソナタイ長調 他	10月28日(水) 19:00 練馬文化センター 小ホール	¥1,000(全席自由)
ジョン・ダムガード ピアノ・リサイタル	11月8日(月) 18:00 バッハザール(入間)	¥1,000(全席自由)
武蔵野音楽大学シンフォニック ウィンド オーケストラ演奏会 指揮=前田淳 曲目=グレインジャー:リンカンシャーの花束、リード:アルメニアン・ダンス(パートII) 他	11月12日(金) 18:30 バッハザール(入間)	一般¥1,500/小中高¥1,000(全席自由)
アルヌルフ・フォン・アルニム ピアノ・リサイタル	11月15日(月) 18:30 シューベルトホール(多摩)	¥2,000(全席自由)
ニュー・ストリーム・コンサートXIV ～ヴィルトウオーソ学科演奏会3～	11月17日(水) 18:30 トップアンホール	¥2,000(全席自由)
入間市市民コンサート 武蔵野音楽大学管弦楽団(入間)演奏会(主催、お問い合わせ:入間市立中央公民館 TEL.04-2964-2413) 指揮=カールマン・ベルケシュ 曲目=スッペ:《軽騎兵》序曲、ベートーヴェン:交響曲 第8番 へ長調 Op.93 他	11月28日(日) 15:00 入間市市民会館	入場無料(要入場整理券)
武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会 指揮=黒岩英臣 合唱指揮=栗山文昭 独唱=ソプラノ:砂川涼子、バリトン:堀内康雄 曲目=ブラームス:ドイツ・レクイエム Op.45	12月3日(金) 18:30 バッハザール(入間) 12月6日(月) 19:00 東京芸術劇場 大ホール 12月7日(火) 18:30 習志野文化ホール	¥1,500(指定席) ¥1,500(全席指定) 一般¥1,500/小中高¥1,000(全席自由)
第2回音楽大学オーケストラ・フェスティバル 武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会(主催:音楽大学オーケストラ・フェスティバル実行委員会) 指揮=黒岩英臣 合唱指揮=栗山文昭 曲目=ブラームス:ドイツ・レクイエム Op.45より	12月5日(日) 15:00 ミューザ川崎 シンフォニーホール	¥1,000(全席指定)
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会 指揮=レイ・E. クレーマー	12月15日(水) 18:30 東京オペラシティ コンサートホール 12月20日(月) 18:30 練馬文化センター 大ホール(練馬区文化芸術振興支援事業)	¥1,500(全席指定)
武蔵野音楽大学室内管弦楽団演奏会 指揮=クルト・グントナー	12月17日(金) 18:30 ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000(全席自由)

お問い合わせ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108

※講師の病气、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽大学ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> でも予約ができます。

武蔵野音楽大学・附属高等学校 平成22年度冬期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会	平成22年12月23日(木)～26日(日)	平成22年11月12日(金)～12月10日(金)	武蔵野音楽大学 江古田キャンパス
高校音楽科受験講習会	平成22年12月24日(金)～26日(日)		

要項請求:直接広報企画室へ、またはホームページ、携帯サイトにてお申し込みください。要項は無料、郵送料は学園が負担します。

お問い合わせ・お申し込み:武蔵野音楽学園広報企画室 TEL.03-3992-1125 ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> 携帯サイト <http://musaon.jp/>

平成23年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。
要項は無料ですが、郵送をご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院の別を明記し、切手(高校は240円・大学1年次・大学3年次・大学院は390円)を同封の上、下記までお申し込みください。なお、冬期講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125

編集後記

記録的な暑さの夏も去り、ほっと心とむ季節を迎えました。さて、本号では体操の米田功さんと先輩の樹原涼子さんから、音大生へのメッセージをいただきました。奇しくも、お二人とも仰るのは「自分を肯定する(否定しない)ことが大切」だということ。自分を信じ、この秋も音楽の道に邁進したいものです(編)。

サクバット

A.ライヒアート作 1602年 ドイツ 全長110cm

トロンボーンは、その名称が「大きなトランペット」を意味するように、トランペットから派生した楽器である。中世期、十字軍の戦利品としてイスラムから直管のラッパがヨーロッパに伝わると、楽器保持の便宜から次第に管が曲げられ、15世紀には自然倍音以外の音を出すために、管の長さを自由に变化できるスライド・トロンペットが考案された。このスライド・トロンペットからトロンボーンが生まれ、当時は「引く・押す」の意味で「サクバット」と呼ばれた。

サクバットは声楽の伴奏に適す楽器として、もっぱら教会で使用された。当時の教会音楽は、複数の声部による流麗な旋律を特徴とするポリフォニー（多声音楽）様式の盛期である。そのような中で、サクバットのスライド・システムは微妙な音程の変化にも対応することが可能で、声楽の旋律に完全に合わせることができる。この楽器はホルネットと共にアンサンブルを組み、主にアルト、テノール、バスが使われ、それぞれの楽器が合唱の各声域をユニゾンで伴奏した。

サクバットは16世紀から18世紀に至るまで、教会

以外ではほとんど演奏されなかった。そのためにオーケストラへの導入が遅れ、作曲家がこの楽器の豊かな表現力に気付くのは、18世紀後半まで待たねばならなかった。トロンボーンが初めて交響曲に使用されたのはベートーヴェンの交響曲第5番「運命」である。一説ではトロンボーンは「神の楽器」と呼ばれたという。その理由には、この楽器のハーモニーの美しさと共に、長年にわたり教会の楽器として敬われてきた経緯も関係しているであろう。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)



❖ 目次 ❖

ゴールは一步一步のその先に ①	米田 功
Campus Eye ⑤	ベートーヴェンホール落成50周年 ～創立者 福井直秋先生の夢の結実から半世紀～
卒業生インタビュー ⑦	ピアノが好き！ 教えるのも大好き 樹原涼子
音楽余話 ⑧	音楽好きの文豪 トーマス・マン コンスタンティン・ガネフ
音楽の万華鏡 ⑨	異国の音楽を伝えることは命がけ 薦田治子
MUSASHINO NEWS ⑩	❖ ウィンドアンサンブル&管弦楽団 定期演奏会／演奏旅行 ❖ 名演が続いた前期公開講座・演奏会シリーズ ❖ バーバラ・ボニー、ステファン・マクラウドによる声楽公開講座 ❖ 第16回インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ終了 ❖ 平成23年度から大学別科を再開 ❖ 武蔵野音楽学園創立80周年記念 ご寄附をいただいた方々 ❖ 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等） ❖ 着任外国人教授紹介 ❖ 平成22年度10月～12月公開講座・演奏会のお知らせ ❖ 武蔵野音楽大学・附属高等学校 平成22年度冬期講習会のお知らせ ❖ 平成23年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖ 発行 ❖

学校 武蔵野音楽学園

法人

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1

TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728

TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1

TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2010年10月1日発行 通巻第95号



携帯サイト
<http://musashino.jp/>